



アジア開発銀行内でも稽古を実施している。道場生は銀行職員15名ほどで依頼があれば警察なども指導を行なっている

稽古風景。空手のおかげで孤児院での喧嘩がほとんどなくなったという

フィリピンの孤児院内に極真空手の道場を設立
武道を通じて青少年育成にあたるNPO 法人代表
[日本人指導者奮闘インタビュー]
NPO 法人 ACTION 代表
極真会館フィリピン支部マグサイサイ道場
横田宗 責任者

子どもたちが夢を持てる、 夢を実現できる環境づくり それを一生の仕事として取り組んでいきたい

横田宗 (よこた・はじめ)
1976年3月20日、東京都八王子市出身。94年、極真会館旧城西支部入門。同年にNPO 法人 ACTION を設立。
04年、孤児院ジャイラホーム内に極真会館の道場を設立し、責任者として約30名の道場生の指導にあたる。
極真会館フィリピン支部所属、初段。35歳。

「まず、この度のアジア・ウェイト制大会によって世界大会出場選手が決定しましたが、選手の組手スタイルの傾向など全体の感想、そして世界大会で期待できそうな選手、目についた選手を教えてください。」
「組手スタイルですが、大会で上位を独占したイランの選手たちは突きの強さと身体の頑丈さが目立ちました。ロシアの選手に似た感じですが、フィリピンやインドネシアの東南アジアの選手たちは、身軽さを活かして

てのう段蹴りや胸廻し回転蹴りなどを多用します。中国の選手たちは非常に日本に近い組手スタイルでした。世界大会で期待できそうなのは、無差別で優勝した Nina Fata 選手(イラン)と準優勝の Mosa Bachei 選手(イラン)。また無差別で4位と健闘した Guard Wahyu 選手(インドネシア)です。もちろん、フィリピン代表の James dela Cruz 選手にも期待したいところです。」
「さて、横田責任者が極真カラテを始めた動機を教えてください。」
「男なら誰しも強くになりたいと思う瞬間があるはずですが、私の中では漠然と強くなる「極真」でした。ただ、近所に道場もなかったため極真カラテをするチャンスがなく、大学入学後に極真カラテの道場に会い始めました。大学のフルコンタクト空手部にも所属をし、夕方は大学で稽古、夜は道場で稽古をしていました。」
「フィリピンを拠点とされることになったきっかけ、またフィリピンで道場を設立し、指導することになったきっかけは。」
「フィリピンを訪れたのは高校3年生の時です。ピナトウボ火山の噴火で被災した孤児院があるということを知り、単身で施設を修復しに行きました。ただ、技術もお金もない私が出発することはほとんどなく、滞り期間中はフィリピンの方にお世話になりました。お世話になった方には恩返しをしたいと思い、帰国後にNPO 設立。以来17年間にわたってフィリピンで子どもたちをサポートする活動をしています。」
「フィリピン以外でも活動をされていると。」
「インドやケニア、ルワンダ、ルーマニアという国々で活動をしてきました。多くの国を回るなかで、現地の極真空手をはじめとする様々な流派

ボクシングのマナー・パッキヤオのように 優れた素質を持っている子どもたちが多くいる 極真空手の裾野を広げ、良い選手を発掘していきたい

の道場を訪れ、空手があるから頑張れる! という方に出会ってききました。そのため、空手や武道の持つ可能性を感じており、いつかは道場をフィリピンで設立したいと考えていました。縁とは不思議なもので、第8回世界大会でルーマニア代表選手たちの引率をしていた時にフィリピン支部のステイブン・フォー支部長、ピクサー先生にお会いし、フィリピンで極真空手を広めたいかと誘いをかけ、2004年に活動の拠点のある孤児院内に道場を設立しました。―― 孤児院内にある極真空道場とのことで、フィリピンの道場生の特徴や、孤児院ならではの苦労もあるのでは。

「フィリピンの人たちは器用な人が多いです。なので、上段廻し蹴りや後ろ廻し蹴りといった大技を簡単に覚えます。その反面、基本があまり好きではない。そのため、きちんと基本の意味や移動の意味を示しながら指導しなくてはなりません。とにかく明るく前向きな国民性で怒られるのが一番嫌いです。そのため、注意の仕方もう工夫しています。また、苦労という点ですが、孤児院内の道場なので、稽古するには恵まれた環境ですが逆に近すぎるのが良くないところですね。いつでも稽古できるので「明日から」来週から」となってしまう。また普段一緒に生活している仲間同士でするので、どうしても馴れ合いがある。そのため、昇級審査は他の道場から指導員や道場生を連れてきて実施しています。孤児院内での喧嘩は道場を設立してから、ほとんどなくなり

ました。先月、日本から美容師さんたちがボランティアで子どもたちの髪をカットしに来てくれました。みんながリクエストしたのは私と同じ髪型。子どもたち曰く「黒帯はまだまだだよねいけど、髪型は先輩と同じ!」。子どもたちの目標になっていることを実感しましたし、気が引けずお断りしました。みんな小さいときから面倒を見ていたので、今後も見守ってまいります。」
「簡単に構いませんので極真空手の指導者として、NPO 代表としての現在の活動内容を教えてください。」
「現在は孤児院内の道場と、アジア開発銀行内にある道場の責任者をしていきます。孤児院内の道場は週5日間の稽古で、道場生は20名ほど。アジア開発銀行では週2日指導をしています。道場生は銀行の職員15名ほどです。また、地方大会の開催や道場合宿を実施しています。依頼があれば、警察等にも指導に行ったりしています。NPO 代表としては、日本に1カ所、フィリピンに事務所が3カ所ありますので各事業の統括



アジアから世界を巡る熾烈な戦いが展開された



強さを誇ったイランチームのメンバー。彼らを筆頭に今大会で選抜された選手たちが世界大会に乗り込んでくる

第1回アジア・ウェイト制大会 兼世界大会選抜

2010年5月28日
フィリピン・マニラ(サンファン市体育館)
主催/フィリピン支部(ステイブン・フォー支部長)



大会はマニラ市体育館で開催された

フィリピン発、世界大会争奪戦 地元フィリピンから4名が上位、 イラン勢が全階級で入賞

2010年5月28日、フィリピン支部(ステイブン・フォー支部長)の主催による第1回アジア・ウェイト制大会(世界大会選抜を兼ねる)が国際委員のピーター・チョン師範を招き、マニラのサンファン市体育館で開催された。アジア22カ国から招待された88名の選手たちが、ウェイト制3階級と無差別級で稽古の成果を競い合った。ここ10年でアジアの選手たちのレベル、極真空手人口は上がっており、特にイランは全階級で入賞するなど軽量級〜無差別級まで選手が充実していた。また、中国やシンガポールの選手が目立ったほか、インドネシアから唯一参加していた選手も会場を大いに沸かせた。ホスト国であるフィリピン選手団は連日激しい稽古をして大会に臨んだ成果もあり、4名が入賞した。大会中盤ではフィリピンの少年部による演武や伝統武道であるアルニスの演武が行なわれ、会場を大いに沸かせた。ピーター・チョン師範やアジア各国の支部長の努力もあり、着実にそのレベルは上がってきている。今回の大会で活躍した選手たちが世界大会という大舞台でどのように戦うのかに期待したい。